■　連載　縄文以来の伊達心⑮

メリノ・ラムは紡毛仕上げで風合い

マテリアル・コンサルタント　川島茂信

3）毛抜け：アンゴラのニット製品の毛抜けは日本人には嫌われている。フランスでは大衆向けアンゴラ高率混製品でも、ナイロンを上手く使って抜けない工夫をしているので、わが国でも一工夫が必要とされる。

織物の場合は毛抜けしないので広範囲に上手く使われている。昔、フランスで普通の兎類の毛を100%で緯糸を紡績し、カシミヤの様な美しい照りを持ったベロアコート地が織られた。最高に暖かく、強靭で一生着られる織物として愛好されたが、目付けの重さと、生産性の悪さからか、戦後衰退した。

アンゴラでも緯糸をアンゴラ100%で紡績し織ると、カシミヤ織物の光沢が出て、アンゴラの素晴らしい純白が生かされた紳士向け替え上着、婦人向けコート地ができる。昔からの商品として、一見ニットの様に極めて、軽く織られたヘリンボーン調の織物もある。

「メリノ・ラム、ファイン・メリノ」

1789年に初めて純メリノ種の羊が南アフリカ経由シドニー湾にもたらされて以来、僅か二百年余りだが、温度差の少ない温暖な気候と、豊かな牧草に恵まれ、且つ執念の品種改良により、今日世界に冠たる、最高に細くて、繊度むらが少なく、純白で、色毛や刺毛の混入しない、最高の羊毛原料が生まれた。

メリノ種でも誕生間もない子羊は、古代種であった時の脂肪尾半時代の名残として、外側は粗硬毛で被われ下に細い綿毛が密生している二重構造を持っている。２・３ヶ月でこの粗い保護毛は脱落し、生後６ヶ月で最高に柔らかい、うぶな毛質になる。このラム・ウールは「優れた毛質はCOMBINGによって均一化してしまう事を避ける」理屈で、梳毛ではなく紡毛で紡績した方が風合をより一層生かすことが出来る。

梳毛紡績向けにはジロン・ラム等の毛足の長いラムが用いられる。我々の大先輩は大正の初めには、FINE MERINOから梳毛ミュールで極細カウントの毛糸を紡績し、半幅のモス・セルのウール着物地を織った。何千年と絹の文化を楽しんできた日本人にはFINE MERINO WOOLは最も重要な羊毛であり、モヘア、カシミヤ、等各種獣毛から日本人好みの製品を作るにもFINE MERINO &MERINOの助けが必要だった。

日本に於ける48／2梳毛糸の原料の買い付けは、定期相場の価格を基準にして繊度むらの少ない、毛足の揃った色の白い、色毛の混入しない、良質の羊毛を買い付け、綿糸の様な真直な糸を紡績する事を誇りとする伝統ができている。欧州では途中の糸の風合いよりも、最終製品の仕上がりを考えてCONTROLされている。IRREGULARITYを第一に原料を選定するので、中心より細めの短いSIDEと、太めの長いSIDEを、基準のGRADE品より安く買い、BLENDして紡績し、意識的に小むらを作り、その小むらが製品の風合いとなり、染色の色に深みを出し、深味のある毛の特質の良さを消費者に伝えるのである。

風合いを出すために、時には紡毛紡績の様な極端にIRREGULARな原料調合で梳毛紡績する。時には梳毛紡績でも風合いや、色出しのためには、CARDINGによりBLENDする。

紡績油にしても、日本では定期相場規格を基準にするから、糸の段階で見栄えが良く、色が白く仕上がり、生産性のみを考えて、加工工程の中で毛が傷まず、最終製品までOILINGによって毛質を守るという配慮に欠ける。

原毛を完全に洗い、水溶性の合成油を使うが、欧州では糸での見てくれは悪くても、最終製品までの工程において、毛が痛められないで良質の風合いが守られる事を第一にOILINGする。

技術的に許される限り原毛の残滓を残すように洗い、鹸化度の良い動物油、植物油を主として用い、僅か鉱物油を混ぜる場合もあるが、最終の仕上げで一挙に石鹸を使って洗い落とすので、仕上がった製品の毛が生き生きとしている。